

秋期福音特別集会(2) (京都)

終末的平和

——イザヤ書第2、9、11、19、25、27、29、35章、黙示録第21章——

1990年11月18日

小池辰雄

曠野魂 律法は隠れたる福音 自由と必然と法 キリストが身じている人 無者は無限無量者
 平和のときが来る 「35—53」(53分の35) 神秘の合唱 羔羊はその宮その燈火 平安は力が
 きている 一人一召団 我々自身が天国体

【イザヤ2】

1 アモツの子イザヤが示されたるユダとエルサレムとにかかると言。

2 すえの日にエホバの家の山はもろもろの山のいただきに堅く立ち、もろもろの峰よりもたかく挙がり、すべての国は流れのごとく之につかん。³ おおくの民ゆきて相語りいわん、いざわれらエホバの山にのぼりヤコブの神の家にゆかん。神われらにその道を教え給わん。われらその路をあゆむべしと。そは律法おきてはシオンよりいで、エホバの言ことばはエルサレムより出づべければなり。4 エホバはもろもろの国のあいだを裁き、おおくの民をせめたまわん。斯くてかれらはその剣つるぎをうちかえて鋤すきとなし、その槍をうちかえて鎌かまとなし、国は国にむかいて剣たたかいをあげず、戦闘たたかいのことを再びまなばざるべし。

【イザヤ9】

6 ひとりの嬰兒みどりごがわれらのために生まれたり。政事まつりごとはその肩にあり、その名は奇妙また議士、また大能の神、とこしえのちち、平和の君となえられん。7 その政事と平和とはましくわりて窮かきりなし。且つダビデの位にすわりてその国をおさめ、今よりのちとこしえに公平と正義とをもてこれを立て、これを保ちたまわん。万軍のエホバの熱心これを成したもうべし。

【イザヤ11】

1 エッサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて実をむすばん。² その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聡明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおそるるの霊なり。³ かれはエホバを畏るるをもて歡樂たのしみとし、また目みるところによりて審判さばきをなさず、耳きくところによりて断定さだめをなさず、耳きくところによりて断定さだめをなさず。⁴ 正義をもて貧しき者をさばき、公平をもて国のうちの卑しき者ために断定さだめをなし、その口の杖をもて



国をうち、その口唇の氣息をもて悪人をころすべし。⁵正義はその腰の帯となり、忠信はその身のおびとならん。

⁶ おおかみは小羊とともにやどり、豹は小山羊とともにふし、犢おじし肥えたる家畜ともに居りてちいさき童子にみちびかれ、⁷牝牛と熊とはくいものを同じし、熊の子と牛の子とともにふし、獅はうしのごとく藁をくらい、⁸乳児は毒蛇のほらにたわむれ、乳ばなれの児は手をまむしの穴にいれん。⁹斯てわが聖山のいずこにても害うことなく、傷ることなからん。そは水の海をおおえるごとく、エホバをしるの知識地にみつるべければなり。

【イザヤ19】

²⁴ その日、イスラエルはエジプトとアッスリヤとを共にし、三つあいならび地のうえにて福祉をうくる者となるべし。²⁵ 万軍のエホバこれを祝して言いたまわく、わが民なるエジプトわが手の工なるアッスリヤわが産業なるイスラエルは福いなるかな。

【イザヤ25】

⁶ 万軍のエホバこの山にてもろもろの民のために肥えたるものをもて宴をもうけ、久しくたくわえたる葡萄酒をもて宴をもうく。臚おおき肥えたるもの久しくたくわえたる清るぶどう酒の宴なり。⁷ 又この山にてもろもろの民のかぶれる面おおいともろもろの国のおおえるおおいぎぬをとりのぞき、⁸ とこしえまで死を吞みたまわん。主エホバはすべての面より涙をぬぐい、全地のうえよりその民の凌辱をのぞき給わん。これはエホバの語りたまえるなり。

【イザヤ27】

¹² その日なんじらイスラエルの子輩よ、エホバは打ち落としたる果をあつむるごとく、大河の流れよりエジプトの川にいたるまでなんじらを一つ一つにあつめたもうべし。

【イザヤ29】

¹⁸ その日聾者はこの書のことばをきき、盲者はくらきより闇よりみることを得べし。¹⁹ 謙るものはエホバによりてその歡喜をまし、人のなかの貧しきものはイスラエルの聖者によりて快樂をうべし。

【イザヤ35】

¹ 荒野とうるおいなき地とはたのしみ、沙漠はよろこびて番紅の花のごとく咲きかがやかん。……

⁵ そのとき聾者の目はひらけ、聾者の耳はあくことを得べし。⁶ そのとき跛者は鹿の如くとびはしり、啞者の舌はうたうたわん。そは荒野に水わきいで、



沙漠に川ながるべければなり。⁷ やけたる沙は池となり、うるおいなき地はみずの源となり、野犬のふしたるすみかは蘆葦のしげりあう所となるべし。⁸ かしこに大路あり。そのみちは聖道となえられん。穢れたるものはこれを過ぐることもあたわず、ただ主の民のために備えらる。これを歩むものはおろかなりとも迷うことなし。⁹ かしこに獅おらず、あらし獣もその路にのぼることなし。然ばそこにて之にあう事なかるべし。ただ贖われたる者のみそこを歩まん。¹⁰ エホバに贖いすくわれし者うたうたいつつ帰りてシオンにきたり、その首にとこしえの歡喜をいただき、樂しみとよろこびとをえん。而して悲哀となげきとは逃げさるべし。

【黙示録21】

²² われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔羊はその宮なり。
²³ 都は日月の照らすを要せず、神の栄光これを照らし、羔羊はその燈火なり。

● 曠野魂

若い方々の司会、それぞれ私は非常に感銘いたしました。この召団の一人ひとりがそれぞれの特色を有つ。非常にいいことです。神さまは一つも同じものを造らない。みんなその人が天下一品である。その天下一品性をキリストは現象してくださる。これが福音の証ということです。いわゆる自己主張では絶対にならない。そういう姿が、私は非常にうれしく、今のお話を聞いていまして、大変うれしく思いました。昨日、私は、

「個が、一人の存在というものが一番大事だ」

と言いました。これが隣人を——隣人というのはおよそでつくわす人——に何かの影響を知らないうちに与えていく、そういう個の存在が非常に大事です。

私は前に『曠愛文庫』というのを書いた。これはあなた方はほとんどご存知ないでしょう。

「預言者の終末観」

「預言者の歴史観」

というのを書いた。随分昔の話ですが、1953年から1954年に。その「預言者の歴史観」という扉の裏を見たら、1953年11月18日と書いてある。約40年前の今日なんだ。その11月18日に書いた『曠野魂』という詩がある。その詩を今ちよつとお読みします。(著作集第八巻『詩歌集』97頁参照)

「曠野魂」

1953年11月18日作

顔に涙の跡が絶えない。

でもこの熱き滴りを、

ホゼアよ、エレミヤよ、

汝らは流したのだ。



私のなぐさめはそこに在る。
胸に炎が燃えている。

まことにこのきらめきは、
エリヤよ、アモスよ、

汝らに烈しく燃えていた。

それが私のはげましである。

魂の奥に光がさしている。

聖なる熱き光である。

イザヤよ、汝はこの光に

あがなはれて雄々しく立った。

ここにこそ私のいのちがある。

聖霊に在って祈りつつ、

聖言を受けて語りつつ、

聖意を体して行じつつ、

まことの実存を貫いた

曠野魂の慕わしき哉！

預言者の祈は今も

天地に深く反響する。

カルメルに現ぜし神の力よ、 (エリヤのこと)

ベテルを振はせし神の義よ、 (アモスのこと)

エフライムを抱きし神の愛よ、 (ホゼアのこと)

ユダに泌みわたれる神の心よ、 (エレミヤのこと)

シオンを照らせし神の霊よ！ (イザヤのこと)

この国の野に山に町に臨みて、

汝の僕らを強く捕へて、

汝の婢らを深く抱きて、

歴史の実存を体現せしめ、

幕屋の展開を進めしめたまへ！

そういう詩です。預言者たちはみなキリストを指すという存在ですけれども。今朝これを発見した。

●律法は隠れたる福音

では、イザヤ書の第2章。

「アモツの子イザヤが示されたるユダとエルサレムとにかかる言。



²すえの日にエホバの家の山はもろもろの山のいただきに堅く立ち、もろもろの峰よりもたかく挙がり、すべての国は流れのごとく之につかん。」(イザヤ2:1~2)

いきなり「すえの日に」と、こう来た。「末の日」というのは終末的な歴史の終わり。歴史の極限のところ。預言者というのはその時代の事を神さまの言葉を受けて、烈しく批判する。そして、警告を与える。救いの約束をする。その救いの約束のところが、もう飛躍しているんです。

「だんだん良くなる」

なんていうのではない。これは空想ではない。神さまの示しなんだ。すえの日。黙示録がこれに応じている。イザヤの預言は非常に黙示録に応じています。

「³おおくの民ゆきて相語りいわん、いざわれらエホバの山にのぼりヤコブの神の家にゆかん。神われらにその道を教え給わん。われらその路をあゆむべしと。」

この「みち」というのが、はじめに「道」と書いてあつて、あとのみちは「路」と書いてある。非常にこれは考えて訳してある。正に「道」であり「路」である。我々一人ひとりが歩くのは「路」の方です。それが天の「道」に即する。決して全体主義ではないですよ。みんなが典型的になつたらダメなんだ。パウロが言っているとおり、

「全身目ならばどうなるか、全身手ならばどうなるか」

と。みんなそれぞれの役割があつて、そして一つのからだをなしている。だから、有機体です。我々のこういう集まりもみんな有機体です、霊的人格の有機体、オルガン。

そは律法はシオンよりいで、エホバの言はエルサレムより出づべければなり。」

(イザヤ2:3)

「律法」はモーセの律法から始まっていますけれども、これは、成文律ばかりを言っていない。そこでまた言い換えて、「エホバの言」と。元来、神さまの言は活きた言ですから、律法も本当は活きた律法。律法という字はもともと「指し示す」という字から来ているんですから。

「こうやれ、ああやれ」

というようなわけだね。指図に従うこと。それが文章になつて、「第一条、第二条」なんて、そういうような意味の律法になった。モーセの十誡も、「一、二、三……」と、十ある。それを所謂「律法」としてしまったのが大きな歴史的な間違いなんです。モーセの「十誡」も実はあれは「十言」である。「デバリーム」なんだ、「十の言」なんだ。申命記に書いてある。十誡ではない。十言です。

「モーセの律法は隠れたる福音である」

と私は言いました。

「汝殺すなかれ」



ではない。

「汝は殺人はしない。私が神だからお前は殺人なんかしないね」

と信頼している言なんだ。それを、「殺すな」なんていう禁令にとってしまったのは、そもそも律法の根本精神を間違えた。そういうことをみんな言わないんだ。親子の関係が「おきて」だったらどうするんですか。それはみんな信頼関係です。神さまはイスラエルの民を信じてものを言っている。

「汝は、姦淫しない。

盗まない。

偽りを言わない。

貪らない。」

と。学校の生徒に、

「お前たちはよく勉強する。カンニングはしない。だから、私は試験監督をしない」

と、私は東大で一遍それをやったです。(試験場から私は) 出て行ってしまった。ちゃんと彼らは正しく試験を受けました。相手を本当に信じてかかると、

「ああそうか、そんなに信じてくださったなら、悪い事をしちや悪い」
となる。

「するな!」

というと、やるんだよ、悪い事を。

「律法は罪を刺激する」

とパウロが言っているとおり。人間世界のどの関係でも全部、信愛関係でなければダメなんだ。労使関係でも、組合なんて作るのはおよそ間違っている。上的人是下の人をいたわり、いわゆる権利主張はダメ。どうも世の中は困ったものだな。

●自由と必然と法

ところが、「法」という字は、本来は、非常に自然な世界だ。水は低きに流れ去る、これが法という字。自然の法則なんだ。全部、自然のすがた。

「自然法に従う、道徳の法に従う、靈法に従う、ということが本当の自由である」ということが、とうてい普通の人には分かっている。

「自由とは法なり」

というんだ。法が本当に自由。それがまた、必然なんだ。自由と必然と法と、みんな同じ。それがみんな狂ってしまうです、人間は慾のために。

「⁴エホバはもろもろの国のあいだを裁き、おおくの民をせめたまわん。

「裁く」「シャーバット」という言葉がよく出てくる。ということは本当は、

「正しいその位置に置く」



ということ。オリエンテーレンするということです。

斯くてかれらはその剣をうちかえて鋤となし、その槍をうちかえて鎌となし、

国は国にむかいて剣をあげず、戦闘のことを再びまなばざるべし。」(イザヤ2・

4)

こういう理想的な世界は未だかつてない。ソ連の印は鎌か、結構なことだ。剣を持てば、

「剣を有つ者は剣で滅びる」

とキリストがおっしゃっているとおり。これが終末的な平和の世界です。

日本の憲法は戦争をしないことになっていくんだが、しかし、自衛隊とかいうなかなか
凄いのがあるけれども、しかしその精神は――まあ、地上では相対的な現実では、国家と
いうものは軍隊がなければ成り立たないでしょう。けれども、理念としては、戦争はしな
いんだ――大変結構な憲法です、世界にないんだから。日本は軍備はしない。軍備は1%、
だからお金がうんと余る。それで日本は経済大国になってしまった。いろんな仕事をして、
いろんな物を製造して。アメリカとソ連は軍備拡張でお互いにやっているうちに、両方と
も大マイナスになってしまった。それでどうにもならん。原子力発電のやりそこないで、
かえってソ連は良かった。まあ、いろんな相対的な事情はあったでしょうけれども、しかし、
対立はいかん、本当の意味の握手をしよう――外交的な握手ではないですよ――本当の
握手をしようと、そういう気持ちでゴルバチョフには出てきたから、それでああいうこと
になって、ドイツもこんなに早く一つに統合されるとは思わなかったと喜んでいるわけだ。
ドイツも日本も驕った。このイザヤ書の1章、2章にも書いてあるとおり。驕ってたかぶつ
た。軍備を誇った。そしてひっくり返った。同じ間違いをドイツも日本もやった。驕る者
久からず、

「驕りは滅びに先だつ」

と、「箴言」にあるとおり。

●キリストが身じている人

イザヤが言っているそういう理想の平和の国。これはまず9章6節、

「ひとりの嬰兒がわれらのために生まれたり。政事はその肩にあり、その名

は奇妙また議士、また大能の神、とこしえのちち、平和の君となえられん。」

(イザヤ9・6)

7章14節に例の

「乙女が生んだ」

という、キリストの預言のようなことが書いてある。「政事」とは権威のことです。「奇妙」という訳がちよつと奇妙だけれども、不思議な驚嘆すべきもの。「議士」、本当の智慧を持っている。



「また大能の神、とこしえのちち、平和の君となえられん」
と。最大級の言い方です。「平和の君」とある。そういう不思議なことを畳みかけて言っている。

「⁷その政事と平和とはましくわわりて窮り^{かぎ}なし。且つダビデの位にすわりてその国をおさめ、今よりのちとこしえに公平と正義とをもてこれを立て、これを保ちたまわん。万軍のエホバの熱心これを成したもうべし。」(イザヤ9・7)

これは素晴らしいね、

「万軍のエホバの熱心」

という。天の万軍を持つている、そんな「エホバの熱心」がその事をやる。いわゆる軍隊ではないですよ、この「万軍」と言ったって。たくさんのお使いがいる。神の熱心がこれをするという。神さまのものの凄い熱意がこれをやる。本願の力です。本願の力がこれをやる。それを受けとって立つのがこの嬰兒^{みどりご}だと。これは全くキリストの預言です。それが「平和の君」だと、平和ならしむる者ということ。

イザヤ書11章に、

「エッサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて実をむすばん。

²その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聰明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおさるるの霊なり。」(イザヤ11・1〜2)

と。ダビデのお父さんは「エッサイ」という。

「エッサイの株より一つの芽いでその根より一つの枝はえて実をむすばん」

と、これは不思議な現象です。「謀略」という言葉はおかしい、これは思慮です。「思慮才能の霊」。「知識」も困る、これは智慧です。

「智慧の霊、エホバをおさるるの霊なり」

と、そういうことを一つの言葉でいうと、本当の「聖霊」です。それがこれにとどまる。これもキリストの預言です。

「³かれはエホバを畏るるをもて^{たのしみ}歡樂とし、また目みるところによりて^{さばき}審判をなさず、耳きくところによりて^{さだめ}断定をなさず、耳きくところによりて^{さだめ}断定をなさず。」(イザヤ11・3)

「エホバを畏るるをもて歡樂となし」

とはいいい言葉だね。「畏れる」というのはこわがるのではない。かしこみ平伏することです。エホバに平伏するのが楽しみであると。「本当の本質を見て、やる(審く、断定する)」と。

「⁴正義をもて貧しき者をさばき、公平をもて国のうちの卑しき者ために^{さだめ}断定をなし、その口の杖をもて国をうち、その口唇の^{くちびる}氣息をもて悪人をころすべし。」(イザヤ11・4)



「貧しき者をさばき」とは、

「貧しき者のためにさばく」

ということですよ。キリストの霊気が悪者を倒してしまうということは、テサロニケ書にも書いてある。

「正義はその腰の帯となり、忠信はその身のおびとならん。」(イザヤ11・5)

「正義はその腰の帯となり、これもエペソ書に書いてある。」

「忠信はその身のおびとならん」

ということは、みんなそれは身についているということだ。とにかく、身についてないものはみんなダメなんです。だから、私は全部これを、

「身ずる」

と書く。身に着いていなければダメです。

「我は道なり」

というのは、真理が頭でわかった一つも道ではない。全存在の中に溶け込んで身に着いている。身についていなければダメだ。それを「身ずる」という。こちらの「信ずる」というのは、へたすると観念になる。こんな乱暴なことを言う人はないでしょうね。これ本当なもの、しょうがない。

「キリストが身じている人」

ということ。

「私はキリストが身じている人、キリストが私の身についている人です」

と、そういうのが本当のクリスチャンです。それが、パウロが言った、

「聖霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

という、そのことです。

そういう人が現れると、その現実はどうかというのと、6節以下に書いてある。

「6 おおかみは小羊とともにやどり、豹は小山羊とともにふし、^{ことうし}犢おじし肥えたる家畜^{けだもの}ともに居^{おり}てちいさき童子^{わらべ}にみちびかれ、⁷牝牛と熊とはくいものを同じし、熊の子と牛の子とともにふし、獅はうしのごとく^{わら}藁をくらひ、⁸乳児^{ちのみご}は毒蛇のほらにたわむれ、乳ばなれの児は手をまむしの穴にいれん。⁹斯てわが^{きよきやま}聖山のいずこにても害^{そこな}うことなく、傷ることなからん。そは水の海をおおえるごとく、エホバをしるの知識地にみつるべければなり。」(イザヤ11・6〜9)

「エホバをしるの知識」ではないよ、この「知識」という訳は困るんだ。

「エホバを畏るるの知」

です。全存在で本当に相手と一つになること。それが「知る」という字です。詩篇の139篇。私たちは神さまに、キリストに知られている。キリストに知られているということは、エ



ライことです。全部、キリストはこれを知って、知ることが同時に相手を救うことである。そういう知り方です、

「大丈夫だよ」

と言って。人の知るのは、すぐ批判をする。批判するような知り方ではない。

●無者は無限無量者

今、この集会に、まだキリスト教は初めての人もいらつしやるかも知れない。いろんな問題がお有りかも知れない。いいですよ、そんなものは、どうでも。一つも心配は要りませんから。みんな人間は同じなんだよな。偉いなんて、偉い者は一つもないんだ。偉いのはキリストだけ。キリスト自身も偉いとはおつしやらない。

「なんで私を善きと言うか、善き者は神さまの他にあるか」

と。これはキリストの言葉ですから。だから、キリストは無善。無教、教えもしない。無言、言いもしない。みんな神さまの言葉が言わされている。無行、何もしない。

「われみずからは何事も為し能わず」

と言っている。神さまの力がやらせているんだと。こういう世界が、キリストは本当に

「無者」

です。無者は、

「無限無量者」

なんです。神さまの無限無量が入って来るから。もう限定できない霊止ひとなんです。無限定のひと。

いいですか、我々の魂はそういうものにぶつかって感激しなかったら――また感激するよにできているんだ、我々の魂は。人間の魂というのは、最深最高のものにだけ感激するようにできている――その感激性がなくなっているようなことでは困るんだ。それはちよつとおかしいんだが、本当は、それがある筈なんだ。魂というのはそういうようにできている。人間の魂は、昨日も申し上げた通り、

「魂たましひ之霊」

なんだ――この「^し之」は強めの字です――「靈魂」なんです。漢字というのは凄いな。万人は魂を持っている。

「万人はこれ宗教人なり」

という。

「信ずるの、信じないの」

と、そんなことではない。いいですね。もう、従来の因習的な考えをすつ飛ばしてください。

「まだ私は聖書を読んでいませんが」

とかね、いいよ何でも。いわゆる聖書研究家よりも、イザヤ書をたった一遍でも本当に身



体で読んだ人の方が聖書の世界に入ってしまう。

ルーベンスがこの状況を絵に描きましたが、こんな世界は考えられない。考えられない世界をこうやってイザヤは示されてうたっている。獅子が藁を食うんだから。

「そんな事があるか」

と。これは聖書に書いてあるものだから、みんな黙って読んでいるけれども、これが聖書でなかったら、

「何だこの本は」

なんて言つて、すぐ破いてしまうよ、

「こんな馬鹿げた気違いな本はあるか」

と。これ気違いですよ、普通の判断からいったら。理性、常識を越えている。

獅子が藁を食うかなんかは知りませんよ。とにかく、そういう、争いのない、お互いに助け合うところの世界が神さまの本当の世界なんだ。それは、現実のうちには考えられないけれども、そこを示されて大胆に書いている。

「そういう世界が本当に現実とならなかったら、空の空だぞ」

と。私は最後に何を言うか、あんた方、今日は驚くよ。

●平和のときが来る

今度は19章にエライことが書いてある。こういうのを政治家が読まなくてはダメだ。

「聖書はベストセラーだ」

なんて言つたつて、しょうがないではないですか、本当に読んでないものね。日本のどの本屋にも聖書は必ず在るということになれば、日本はダメだ。仏典もそうだよ。聖書と仏典はしつかり置いておく。

「²⁴その日、イスラエルはエジプトとアッスリヤとを共にし、三つあいならび地のうえにて福祉を^{さいわい}うくる者となるべし。²⁵万軍のエホバこれを祝して言いたまわく、わが民なるエジプトわが手の工^{わざ}なるアッスリヤわが産業なるイスラエルは^{さいわ}福いなるかな。」(イザヤ19・24、25)

「その日」、終末の日。この三つの世界はしゅっちゅう喧嘩している。

「これはみんな私の手のわざだ、私の有^{もつ}だ。みんな幸いだ、一つになったね」

と。今、ソ連とアメリカは、対立が今度は融合になつてきた。ドイツも一つになった。今に、朝鮮も、北朝鮮と南朝鮮が一つになる。イデオロギーでは一つにならない。それぞれのイデオロギーでいいですよ、イデオロギーはイデオロギーで。それには限界がある。限界がない世界は何かというと、

「人間である」

ということ。



“Sei menschlich!”

「人間的であれ！」

と。本当のヒューマニティです。人間であることがどの人種も皆一つだ。そういうところに立ち帰るためには、宇宙創造の絶対なる神さまに、魂がスイッチを入れなければ、繋がなくては。人間というのはそれ以下のものではない。

学校の教育は本当はそこから始まらなくてはダメなんだ。それを、

「公立では特定の宗教は教えてはいかん」

なんて言う。構わないからどんどん話してやれ。伝道しなければいいんだから。

「キリスト教とはこういうものだ、仏教とはこういうものだ」

なんて言って話したらいい。本当に歴史を歴史として取り扱っていないからね、色をつけてしまっている。

そういう平和のときが来ると、これもはつきり、イザヤが言っている。これは第一イザヤだよ、本当のイザヤ。

「⁶万軍のエホバこの山にてもろもろの民のために肥えたるものをもて宴をもうけ、久しくたくわえたる^{すめ}葡萄酒をもて宴をもうく。随おおき肥えたるもの久しくたくわえたる清る^{すめ}ぶどう酒の宴なり。⁷又この山にてもろもろの民のかぶれる面^{かお}おいとともろもろの国のおおえるおおいぎぬをとりのぞき、⁸とこしえまで死を吞みたまわん。主エホバはすべての面^{かお}より涙をぬぐい、全地のうえよりその民の^{はずかしめ}凌辱をのぞき給わん。これはエホバの語りたまえるなり。」(イザヤ25・6～8)

もう涙がなくなる本当の世界。黙示録に書いてあるのと同じことだ。27章の2～6節に、そのことが書いてある。これも葡萄園。2節も12節も13節も「その日」と書いてある。

「¹²その日なんじらイスラエルの子^{こら}輩よ、エホバは打ち落としたる果をあつむるごとく、大河の流れよりエジプトの川にいたるまでなんじらを一つ一つにあつめたもうべし。」(イザヤ27・12)

「¹⁸その日聾者はこの書のことばをきき、盲者はくらきより闇よりみることを得べし。¹⁹謙るものはエホバによりてその^{よろこび}歡喜をまし、人のなかの貧しきものはイスラエルの聖者によりて^{たのしみ}快樂をうべし。」(イザヤ29・18～19)

「謙る者」「貧しき者」、みんな同義語的に使っている。とにかく、平伏さなければダメだということを用意者はしょっちゅう言っている。高ぶる者はサタンの手下になる。サタンは傲慢の霊ですから。

「平伏す^{ひれふ}」

というのはいわゆる日本語でいう「謙遜」なんてものではない。イスラム教ではよく平伏して拝んでいるね、一日に五回拝んでいる。あの真似をしとは言わないけれども、日本



人は平伏しがないもんな、正直。へんてこな遠慮はあるけれども。本当に情けなくなってしまう。

●「35」53 (53分の35)

第一イザヤの最後は何といってもイザヤ書35章です。これは旧約で私の一番好きな所といつてもいい過ぎでない。

「荒野とうるおいなき地とはたのしみ、沙漠はよろこびて番紅の花のごとく咲きかがやかん。」(イザヤ35・1)

もうそこが楽園に、パラダイスになつてしまう。そして、自然界のパラダイスがそこに現れるかと思つたら、今度は人間界の天国がそこに現じて来た。それが5節からあと。私たちがよく集会の最後に歌う聖歌『いつかは知らねど』はこのイザヤ書の35章です。『真白き富士の峰』のあの曲だよ。あれを聖歌に私は発見した時は嬉しかったね、ああこんな歌があつたかと。

「⁵そのとき聾者の目はひらけ、聾者の耳はあくことを得べし。⁶そのとき跛者は鹿の如くとびはしり、啞者の舌はうたうたわん。そは荒野に水わきいで、沙漠に川ながるべければなり。⁷やけたる沙は池となり、うるおいなき地はみずの源となり、野犬のふしたるすみかは蘆葦のしげりあう所となるべし。⁸かしこに大路あり。そのみちは聖道ととなえられん。穢れたるものはこれを過ぐることもあたわず、ただ主の民のために備えらる。これを歩むものはおろかなりとも迷ふことなし。⁹かしこに獅おらず、あらし獣もその路にのぼることなし。然ばそこにて之にあう事なかるべし。ただ贖われたる者のみそこを歩まん。¹⁰エホバに贖いすくわれし者うたうたいつつ歸りてシオンにきたり、その首にとこしえの歡喜をいただき、樂しみとよろこびとをえん。而して悲哀となげきとは逃げさるべし。」(イザヤ35・5〜10)

素晴らしいね、これ。同じことが黙示録に出ている。旧約聖書からこのイザヤ書を取つたらどうなるかと思うくらいだ。

この天国的な現実を正直現じた人が現れた。いうまでもなくキリストです。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、福音書の現実はこのイザヤ書35章を、彼が地上で現じ給うた。「その日」とは、その日は歴史の終末ではなかった。預言者たちがいつている「その日」はキリストが地上において現じた。終末の世界をキリストは地上でもつて現じられた。大変なことです。だから私は、キリストは大変なひとだ、と言っている。

キリストの贖いの53章とこの天国的現実の35章。

「35」53 (53分の35)

これは私の符号だよ。十字架の贖い(イザヤ書53章)と聖霊の充滿しているところの天国



的現実(イザヤ書35章)。これは同時に福音書の現実です。イザヤ書35章で約束しているところの預言をキリストは地上で現じ給うた。歴史の最後の、黙示録で最後に言っている現実は、実際どうだか知らん。けれども、キリストは地上でそれを現じられた、大変なかたである。死人をも甦らせてしまった。柩があれば、柩に手を置いて

「起きよー」

と言ったら、死人が起きあがってきた。

「平和」ではない。それは本当は「平安」なんです。平安。京都の人にはよく分かる。平安神宮があるから。あなた方は非常にいい所に住んでいる。あそこに行つて拝むことはないけれども。あなた方自身が平安神宮になればいい。

「私は平安神宮ですよ。どこかへ、あそここの平安神宮へ行く必要はありません。私をご覧なさい」

と。神さまとの関係が完全に立つて、神さまの力を100%に受けとったキリストが平安者なんです。平和ではない。平安者が平和を成らしめていく。だから、平安という事態が一人ひとりに起きない限りは、平和は来ない。

「平和、平和」

なんて騒いだってダメなんです。一人ひとりが平安を本当に身^{しん}じなければ。

「身^{しん}ずる」(身につける)

という世界にこなければ、この平和は来ない。どんなに乱れていたっていいよ、自分が本当の平安にあるならば。平和ならしむところの存在として祈っていく。地上でその祈りがきかれなくたって一向差し支えない。

●神秘の合唱

ゲーテの『ファウスト』の終わりの方で有名な「神秘の合唱」がある。

Alles Vergängliche

Ist nur ein Gleichnis;

「あ^いづる過ぎ行くものは

映像に過ぎなく」

本体の映像だよと。むしろ、「映像たるのみ」と訳してもいい。

Das Unzulängliche,

Hier wirds Ereignis;

「及^いびがたきものが

ここでは現象した」

ここでは事実となったと。及^いびがたきイザヤ書の35章はキリストがここにおいて現じた。ゲーテの最後のこの句は全部キリストが身証なさった。身をもつて証しなさった。誰もそ



んなことはゲーテ学者は言えっこない。

Das Unbeschreibliche,

Hier ist's getan;

「表現し難きものは

ここではなされていく」

キリストは福音書で。

Das Ewig-Weibliche

Zieht uns hinan.

「永遠に女性的なるものが

我らを引き上げて行く」

女の方は非常にスーッと福音を受けとりやすい。理屈を言わないから。男は理屈ばいからね、理性が先に立ったらダメなんです。私が昨日言った、

Das Ewig-Mütterliche

「永遠に母性的なるもの」

母。皆さんは母親だ、子供があってもなくても。母たるものは実は大事な子供をつくっていく。

「偉大な人たちはみんなお母さんの魂がいい」

と言ったでしょ。歴史は女性がつくっている。母性が、本当の母性が。だから、本当は女子教育が大事なんです。私は女学校の校長さんになれば良かったんだけど。今の教育は本当に大問題だよな。ただ男女同権なんてそんな事ばかり言っている。冗談ではない。それぞれの特色がある。社会的には同権だつていいよ。けれども、それぞれの特色と使命がある。でなければ、神さまは男と女に造りはしないんだ。

で、どこへ連れて行ったかというところ、書いてない。そこがゲーテのまた、ゲーテたるよさなんです。余韻がある。どこへ引き上げて行くのかと。彼は書かない。私はバカだから書いた。

Mit Lieb' und Wonne

Zur heiligen Sonnet

「愛と歓びをもつて

神聖なる太陽へ」

と引き上げて行く。「神聖なる太陽」とは神さまのこと。

「太陽」(Sonnet)

ソネット

というのは、あのゲーテというのは太陽が好きだから。太陽で始まって

いる詩だから、太陽で終えてやった。ダンテは瞑想の詩人だから、星が好きなんです。地獄篇、煉獄篇、天国篇は全部、「星」「ステレ」という言葉で終わっている。星々という複数ですけども。昼の詩人はゲーテ、夜の詩人はダンテという、非常に型の違った詩人ですけども、



そいつを私はキリストの光でひつくるめてしまった。まあ、こんなのはちよつと正直ないんだよ、世界にね。ダンテとゲーテを両方とも好きだなんていうのは。大体どつちかなんだ。私はキリストの光でどつちも掴つかんでしまふ。

とにかく、ゲーテの素晴らしい最後の句は、全部実はキリストが地上でなさった。たつた2、3年で。大変な方です。福音書を読んだら驚嘆する。イザヤ書と福音書をポケットに入れてなさいよ。

● 羔羊はその宮その燈火

それが、「終末」だけれども、ついで見たいのは黙示録21章22節、

「²²われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔羊はその宮なり。」

(黙示録21・22)

まあ、こんな表現があるかというんだ。神さまと羔羊こひつじが宮であつて、天の都、天のエルサレムにはお宮も何もない。

「²³都は日月の照らすを要せず、神の栄光これを照らし、羔羊はその燈火なり。」

(黙示録21・23)

と書いてある。「羔羊こひつじ」とはキリストのこと。そういう宮がまた地上で動いていた。そういう光が地上で照つていた。みんなキリストです。だから、福音書のキリストというのは大変なんだ。それで、

「お前たちに本当の現実を与えるために、まず自我をすつ飛ばしてやるぞ」

と。これが十字架です。甦よみがえつてきた。キリストはもう甦よみがえらざるを得ない。現れざるを得ない。

「私は永遠の生命だ」

と。キリストの言は全部事実をもつて裏づけられていますからね。事実が最大の言葉ですから。もうやりきれんです、凄くて、楽しくて、ありがたくて。

藤田東湖の「天地正大せいだいの気」というのはよく、私は言います。天地正大の気は、本当は聖霊だ。

「秀ひででは富士ふじの嶽がくとなる。

富士山も天地正大の気が現象したものだ。

濺そそいでは大潁たいれいの水となる。

日本はその水に囲かこまれている。大八州が水に。

開ひらいては万ばん葉だの桜さくらとなる。」

桜の花もそうだと。あらゆる自然的現象は、実は神の気が、霊気がこれを現象せしめたという。

霊気と空気。この「気」の世界は凄いんだ。「今日のお天気はどうか」なんていう普通のお天気ではない。天の気ですから、全部。京都の空気はいいよ、東京よりか。山の中に行くと、空気の味が違う。だから、私は時々野尻の山の中に行く。



私はこないだ本屋で十年の日記帳を見つけた。十年間つける。一頁が十年間、十に分かれている。メモ的に書くんだけれども。来年から書こうと思う。あの日記帳が終わる頃に私の詩が多分でき上がるでしょう。その意味でもね。「遺恨十年」なんていう言葉もあるけれども。十年一日の如く。

「二日は千年の如く、千年は一日の如く」

要するに、現在において本当に永遠を生きていく。今日一日を本当に永遠として生きていく。だから、もう心配なくなってしまった。一人も伝道しなくなつていい。私の兄貴は死をもつて私に伝道した。生きている時には、何も私に

「聖書を読め」

とも言わなければ、

「祈れ」

とも言わない。ところが、この兄貴は死をもつて伝道した。これに私は生涯をもつて応えざるを得ない。「ねばならない」という世界はダメなんですよ。

「ざるを得ない」

世界が本当の世界です。

そういうことで、パウロも、

「すでに得たりと思わず、いよいよこれからだ」

ということは実は、

「キリストでいただいています、だから、いよいよ追求します」

ということだ。これはもはや理想主義的な追求とは違う。限りなく追求せざるを得ない。我々も限りなく追求せざるを得ない。楽しい。

私はまだ読みたい本がいくらでもある。勉強のためにはいつまでも生きていたい。皆さんとこうやって出会って、この福音の喜びを共にすること、こんな楽しいことはない。ひと一人の人がひっくり返って、そして福音の喜びを受けとっていくことを見るくらい、うれしいことはないです。

●平安は力がきている

こないだ、塾の教室で、

「お母さんたちにお話をしてください」

と言ってきたので、私は今の角度から福音を話して、

「いいですか、キリスト教なんて、もったいぶる必要は一つもない。あなた方一人

ひとりが永遠の質を持ったお母さんになってください」

と話したら、感激してしまつてね、もう幾人かは新約聖書を買って、また私の本も読み始めたらしい。



とにかく、もう日本は、教育は学校に任せておけないから、家庭で本当の教育をしないと。それも、ただ聖書を読めとか何とか、ただそんなこと言っている必要はない。姿でいいです、姿で。それから自由に――その時その時に自由に示し方は与えられますから――やっつけらつしやればよろしい。

十二の召団は一人ひとりがその召団を背負うだけの、

「私が召団を背負ってます、担っていますよ」

という、そういう個人個人でいてください。そのときには

「大丈夫ですよ」

と申し上げているわけです。それは本当の平安がきている。平安というのは力がきているんですよ、あのギデオンの所と同じように。ギデオンの所で初めて、

「平安の神、エホバ・シャールーム」

という言葉が出てくる。自分が平安者であれば、どんなに混沌たる周囲があっても、それで決してガツカリしたり憂いたりしている必要はない。必ず平和を現じている。そのことはキリストが福音書の中でなさった。だから、キリストを身じて、それを現じることがおのずからなっていく、自然になっていく。聖書を読むことが直ちに祈りである。別に祈禱会をする必要もない。読みながら聖書の人物と一緒に祈っている。

まあ、そんなことで、皆さんには私は信頼しているから、何でも勝手に言えるんだけど。今日新しくいらつしやった方も、そういうわけで、どうぞ従来の観念に捕らわれることはないですから、キリスト教なんて難しいものでも何でもありません。

「おさない翻りて幼児の如くにならなければ、神さまの国に入れない」

と。幼児は、笑うのも、泣くのも、遊ぶのも、全部全身でやっている。

いつかもし言いました。私は自分の孫の幼稚園の送り迎えをした。自転車で行く。幼稚園に行つて、「ヨーコちゃん」と言うと、一生懸命に遊んでいるのに、パッとやめて走ってくるからね。「ちよつと待って」なんて言わない。パッとやめて走って来るから、かわいいものだね。

そのように幼児の如く、直ちに神さまに向かつていくようなことにならなければ、天国には入れない。そのようであれば、必ず天国に入れる。幼子をいい加減に取り扱ったら大変なことだと。

「天使がちゃんと神さまの顔を見ているぞ」

なんて、キリストは言われた。

小川はきれいです。大きな河になると濁ってしまう。大人になると、いろんな余計な要素が入ってきてしまう。その小川のきれいをもう一遍私たちに、その天来の泉を飲ましてくださっているのがキリストですから。

「わが水を飲む者はとこしえに渴かず」



「わが火を点ずるものとはとこしえに消えず」

という、そういう世界だ、我々のいただいている世界は。そして、何を讀もうが、何をしようが、必ずそこから真理を引っ張りだしてくる。キリストの光だね。これは不思議なものです。

あなた方は、チャップリンをよく見たかね。チャップリンの『独裁者』と『街の灯』と『モダンタイムズ』、あの三つは傑作だな。『黄金狂時代』というのも面白い。あんな喜劇役者で、人を泣かせるような内容を持った人はちよつと居ないね。おそらくもう出てこない。やっぱり彼もユダヤ人だ。ドイツにいたら殺されるところだった。

●一人一召団

我々はまた、新しきエルサレムの遺れる民ですから。そして、世の中に望みがなければ、ないほど、逆に天来の望みが力強くやってくるから。それで絶対に光っていつてください。

「汝らは世の光なり」

と。キリストが光ってくださいるからね。もういい加減な「信仰」とか何とかではダメなんだ。それだから、そういう遺れる民としていいよ、この召団は――「どの召団が何人だ」と、そんなことは私は一つも言つてませんから――各員が行つてくださいよ、一人ひとりが。

「二人一召団」

それでいいんだ。一人一召団的な本質の一人ひとりが、これが本ものなんです。そういう群ならざる群。非連続の連続。孤軍万軍。いいですね。

世界に日本が貢献しなければならぬ大事なものが、その一点が欠けていた。

「神の言を聴くことの饑饉なり」

とアモスが言った。それが欠けている。それやこれやを、私はこれから十年かかって、あるものを通して告白しますから。それをやらなければ、死ぬわけにいかん。兄貴の死に対しても、それをもつて応えなければならぬ。母の失明に対しても。

皆さん、いろいろな、ご生涯で悲惨な事や哀しかったことや、どうにもならない間違だのいろいろとあるかも知れませんが。いいですよ、どうでも。それが逆に本当の跳躍台になる。本当の幸いにそれを変えることができるから。福音というのは有難いです。そういう意味で、大きな角度から、やりそこないは一つもない。全部、神さまの恵みの中に入れられていく。恵みへの路なんです、一人ひとりそれぞれ。

「だから勝手なことをしていい」

なんて言っているのではないですよ、何も。

もう、聖書の世界は限らない。ルターさんが、こんなに聖書を訳した彼が、

「聖書はかけらにすぎない」

と言った。驚いたね、この言葉には。



「聖書はかけらだ。神さまの言葉なんてものは盛り切れやしない」

と。これは福音書のヨハネ伝の終わりの方にも書いてあるけれども。要するに、無限無量の世界だから、無限無量の内容を質的にいただくんです、質的に。そうしたら、はちきれのような生命力があなた方に充満してくる。

「外なる人は破れても、内なる人は日々に新たなり」

とパウロが言った。

私は、これは総入れ歯ですよ。歯医者さんが非常にうまいから、自然の歯みたいだ。ちつともガタツともいわない。ドイツに行く前に作ったのが、未だ改良しないんですよ。もう27、28年たつ。歯医者ビックリしているんだ、あなたの歯茎はちつとも退かないと。普通は退いて、また作らなければならないのに、あなたの歯茎は不思議だと言った。まあ、み霊のおかげでしょうね。耳もいいし、目も。まあ、眼鏡はいるけど。とにかく、必要なことを神さまはしてくださる。いいよ、手がなくても、口でもって絵を書く人がいる。大変なものだ。とにかく、キリストを受けとると、人の思いにすぐれることが、自分自身も驚くことが出てくるから。聖名を讃え、栄光を現していく。

「己を愛するは、これ罪の最大なもの」

と、南洲もそんなことを言った。南洲は聖書を読んだかと思うような言葉があるね。

「我が弟子となる者は己を憎まなければダメだ」

なんて、キリスト自身の言葉だ。こんな者を問題にして何になるかと、自分を蹴飛ばしながら進んで行くようなわけです。そういう不思議な現実です。もう説明できないですね。要するに、説明は要らない。キリストは説明や解釈をなさらない。言い放しなんです。

「聴く耳あるものは聴くべし」

「見る目ある者は見るべし」

なんてなわけで。あなた方とこうやって私は話していると、気合が合っていると思ってるから、うれしい。気合の世界だ。

●我々自身が天国体

それで、どのような現実であろうとも、我々自身が天国体として歩いていくことです。キリストをいただいているれば、天国体。どんな闇の世界も光の世界に変えていく。現実を現実としてただ悟っていくのとは違う。現実の中に、イザヤが預言しているような世界をキリストと共に現しながら歩いていく。イザヤが言っている世界は、実は我々自身が現象し得る世界なんです。単なる理想でない。根源現実においてそこに現していくことができる。

「へえ〜?」

なんて思っても知れないけれども。世の終末が、終末を現在化して動いていたキリストを受けとると、その終末の世界を現実において私たちは、



「聖国を来たらせ給え」

「はい、聖国は来ています」

と言える。キリストは、

「天国は汝らの内にあり」

と言ったでしょ。だから、いつ仆れても、アーメン・ハレルヤなんです。

私の詩も未完成だっていいよ、未完成交響楽みたいに。藤井先生の詩はとうとう未完成だったけれども。本当は、人間のしたものはみんな、本当の意味で完成なんてものは有りはしない。ゲーテも、あの詩も、本当に完成した詩を出版では知らない。後から出版されただんだから。ダンテもそうだ。ダンテは、『天国篇』の第13歌から後は、これを発表すると焼かれるからといって、ダンテは原稿を隠してしまった。隠して居なくなってしまった。天国篇は未完成かと思ったら、兄弟の弟の方に夢に現れた。お父さんのダンテが、

「お前は兄さんと一緒に行って、これから少し先へ行った二番目の角を曲がった所の家
の二階の壁の中に後が隠してあるから」

と。行ってみたら、本当に隠してあった。これは本当の話だよ。

まあ何はさておき、この美しい大自然を損ねたら人類は大変なことになる。神さまの前に平伏さなかつたら、どんなことをしてもダメになる。第二の宗教改革を本当にやっていかなければ。誰がやるか。あなた方一人ひとりが、我々一人ひとりがやる。一人の存在がいかにもの凄い元始力であるかということを、本当に自覚してくださいよ。元始力。始めの力、ウル・クラフトです。

物理的に言ってもそうだ。親指にこもっているところの物理的な力というものは、戦艦一つを動かすことができるそうだね。大変なものだ。いわんや、み霊の世界はエライことです。限らない。キリストを限りなく受けとっていく。正に、キリストは初めて中で終わりである。そういう驚くべき方ですから、お釈迦さんは本当は比較にならないですよ。お釈迦さんもダルマの力で動いていた。ダルマというのは聖霊みたいなものですから。ソクラテスもダイモニオンで。みんなその霊的な力で動いているんだ、ああいう人たちは最後は。だから、「35」53」（53分の35）で、我々はこの十字架（イザヤ書53章）を通して聖霊（イザヤ書35章）を頂いたから、皆さん一人ひとりが「35」53」だ。切っても切ることのできない現実です。

それでは、あと祈りましょう。

